

# CONSERVATION VOLUNTEERS Vol.20

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：JCVN）

特集	_____ ボランティアからグリーンキャリアへ	p1
報告	_____ Local Food Cycle現場リーダーのサポート	p5
連載	_____ ボランティアリーダーについて思うこと	p6
	_____ 事故事例コラム 他	p7

## 特集：ボランティアからグリーンキャリア（Green Career）へ

### ■グリーンキャリア（Green Career）を考える

朝廣和夫（九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門、JCVN理事長）

#### ■米国におけるグリーンキャリア

今日は、「グリーンキャリア(Green Career)」について、提起させていただきます。この言葉は、おそらく、日本では、まだ使用されていません。

この文言は、特に米国において重視されている概念と考えています。そのまま翻訳すると「緑の経歴」、もしくは「緑の雇用」であり、狭義には、緑に関する企業・団体の就活イベント等で用いられています。しかし、広義には、米国社会の隅々に浸透しています。例えば、1929年にルーズベルト大統領が開始したCivilian Conservation Corpsによる国立公園づくりは、各州で反響を呼び、現在も継続展開しています。特に、貧しい若者の技術の習得、緑系の企業への就職、そして、大学への進学への「キャリアパス」を確保するために、この「コンサベーション・コア(Conservation Corps、国内青年協力隊)」を「グリーン・パス (Green path)」として利用されていることが知られています。これらの活動は、「教育としての緑の活動」

として位置づけられているのが特徴と言えます。半年から1年、隊員として緑の活動に従事する若者たちに、連邦および州政府から約10万円/月程度の生活費が支払われ、雇用するNPO等の団体が緑地管理団体の委託事業をとりながらコアの事業を展開しています。日本では、私たちJCVNの理事であるNPO法人トチギ環境未来基地の塚本竜也代表理事が日本へのコンサベーション・コアの導入の取組を進めておられます。

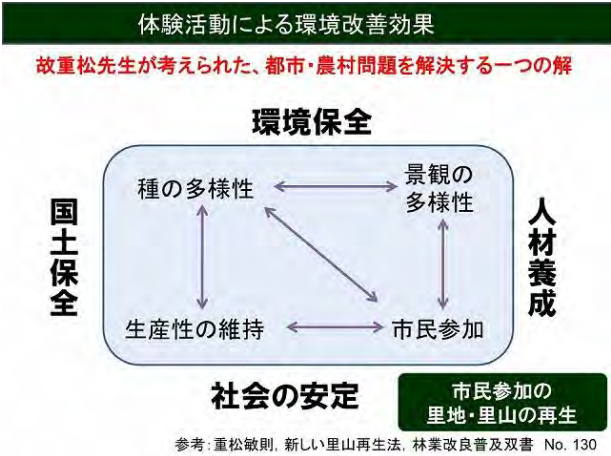
このような、緑を通じたキャリア育成、または、キャリアの変更はコンサベーション・コアに限りません。本誌でLocal Food Cycleを紹介されるJCVN理事の平由以子氏は、米国のコンポスト活動の調査をされています。例えば、ロサンゼルスコンポスト・ハブであるGrow Goodという都市農業を推進する団体は、人材育成、ホームレスへの食料提供、そして、退役軍人のPTSDを含む生活習慣改善のプログラムを実施しています。ニューヨーク市住宅局は公営アパートのコミュニテ

イ・ガーデンを用い、非営利団体Added Value Farmsと連携し、生ごみを持参した人々、また高齢者への野菜の提供活動を行っているそうです。このように米国では、様々な団体が、緑の中での就労により人生のキャリアを変えるツールとして、このGreen Careerを活用し教育としての人材育成活動を行うとともに、都市や自然地域において様々な緑のサービスを提供しています。これらのことは、米国社会において、Public Service Careerが重視される背景もあります。自分の履歴書の中に学歴・就職履歴だけでなく、公共への奉仕の履歴、緑の奉仕活動の履歴も価値を持つからだと考えます。

■日本人の緑の活動は減少しているのでは？

さて、日本はどうでしょうか。昔は国民の80%が農家でしたから、私たちの遺伝子には根っからの何かが組み込まれています。しかし、現在、農家人口は418万人、国民1億2千万人の約3%となりました。もちろん、造園業や林業など、環境に関わる職種は他にもあります。そもそも、緑に関する雇用の機会が減少傾向にある状況です。

一方、地域奉仕活動、ボランティア活動については蓄積があります。地域では道路愛護や公民館の清掃、学校関連でも周辺に松林などの自然地や大切にしている公園などがあれば、管理や清掃活動が行われています。また、ボランティアについては、街並みを美しくする園芸活動、公園愛護会、自然観察指導員、里地・里山の保全、そして、森林ボランティアなど多様な活動が展開されています。JCVNの前理事長であった故重松敏則先生も、下記のスライドに示すように、里地・里山における体験活動による人材育成を通じた、環境保全、国土保全、そして社会の課題の解決を論じられていました。



しかしながら近年、少子高齢化・人口減少の影響か、団体の高齢化が進み、若者の参加は減少傾向にあるという声も少なくありません。農村地域の人口減少は止まらず、都市の人口は増え続けています。若い人は仕事を求め、また、低賃金化の傾向もあり、緑の生活環境を敬遠しつつあるだけでなく、緑と関わる生活的余裕も失いつつあるのではと懸念されます。

■「グリーンキャリア」の着想

2019年4月頃、九州大学大学院芸術工学研究院の九州SDGsデザインネットワークの取組で、博多の株式会社オカムラ共創空間「Tie」で「第2回九州SDGsデザイン会議」が行われ、私から、「『グリーンキャリア』を開拓する!』というお題で話題提供をさせていただきました。趣旨は「企業戦略として、教育ツールとして、暮らしの糧として、キャリア形成の武器として、様々な角度から「グリーンキャリア」の活用を考える」というものです。これを企画する際、実は、博報堂九州支社を母体とする活動体「九州しあわせ共創ラボ」の松本氏と、講演のキーワードについて頭を悩ませました。企業などの様々な団体、メンバーが聴衆として参画するネットワーク会議において、私がこれまで関わってきた「緑のボランティア」では、今後のSDGsの取組をデザインするキーワードとしては十分でないという観点でした。そこで、議論の上、発案されたのが、このグリーンキャリアという文言でした。企業人の、企業のグリーンキャリアを問う。これは、企業そのもののSDGsへの取り組み、また、職員一人一人の暮らしそのものを問うことであり、デザインの関与する可能性が格段に広がる可能性が感じられると考えられました。講演では、「おもしろい」、「興味深い」というコメントに触れることができました。

この7月には、美しい森林づくり全国推進会議、林業復活・地域創生を推進する国民会議が主催す

る「森林×SDGsで拓く「森林イノベーション」シンポジウム」で、「豊かな仕事と暮らしを育む、SDGs時代の森人づくり ～教育・健康・暮らしを支える「Green Career」を問う～」という内容で、東京都千代田区平河町の砂防会館で講演する機会をいただきました。このシンポは、今後の森林サービス産業の展開を模索するという、現在の森林空間の活用方策を考える上で、重要な視点で行われたものです。

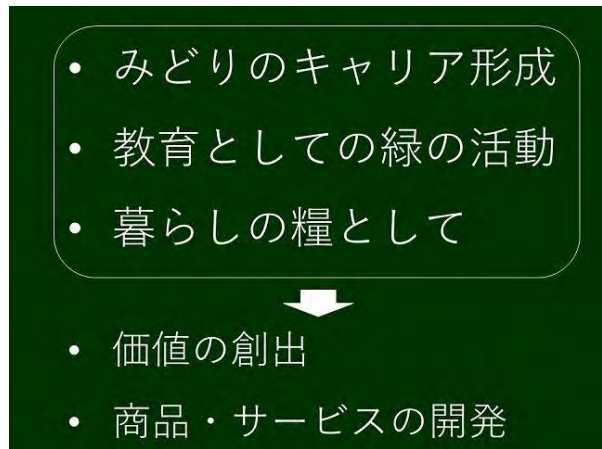
私たちJCVNは、前理事長が大阪府立大学の助手時代に、英国のBTCVのConservation Holidayの取り組みを視察し、国際里山田園保全ワーキングホリデーの活動として、1990年代より各地で取り組み、その流れの中で、BTCVよりボランティアリーダーの育成プログラムを学び、展開・継続を実施しています。このBTCVの設立は、実は、1959年にConservation Corpsとして始まっています。現在は、TCV (The Trust for Conservation Volunteer) と改称し、下記の図のように、コミュニティの育成、環境の保全、セミナーや実地指導を通じた人材育成、そして、健康・福祉に関する活動等、雇用スタッフやボランティアリーダー達とボランティアの参画による緑を通じた地域環境の改善活動を展開しています。私たちJCVNの目指す方向性も、このような社会の実現にあります。



■日本のグリーンキャリアのフロンティアは、災害、健康、孤立、貧困

こういう都市化、情報化の時代、私たちは、自分のキャリア形成の中に、「どのような緑のキャリア形成をしてきたのか？」ということを問う必要があると考えます。それは、米国とは異なるものの、日本の社会においても、様々な問題が露呈しており、緑の活動を通じた問題の制御、解決の可能性が十二分にあるからです。その価値は、右上の図に示すように、「緑のキャリア形成」、「教

育としての緑の活動」、そして「暮らしの糧」として役に立つと考えられ、そのような活動を通じた価値の創出、商品・サービスの開発が求められます。



特に日本におけるグリーンキャリアの必要性は、現代の課題である、災害、孤立、貧困、健康、このような身近な問題との連携が想定されます。もし、大災害が来て都市機能がストップしたらどうするのか、一人暮らしになったらどうするのか、お金が無くなったらどうするのか、健康を維持するために何をするのか。そういうことが、誰にでも起こり得る世の中となり、実際、大きな社会の課題として毎日、新聞で報道されています。グリーンキャリアで培った緑のリテラシー、技術、仲間、装備、拠点、組織は、全てではありませんが、自分の人生の助けとなり、他の人や自然を助けることもできます。

人生を通じて、グリーンキャリアを磨くことが、リスクへの備え、豊かな人生のために必要です。国内を散見すれば、いくらでも優れた取り組みがあります。このような視点での、企業・行政団体のコミットが期待されます。



## ■ 環境保全活動と、グリーンキャリア

塚本 竜也 (JCVN理事/NPO法人トチギ環境未来基地 代表理事)

NPO 法人トチギ環境未来基地では、米国の Conservation Corps (コンサベーション・コア) をモデルとした若者のチームによる長期間 (3 ヶ月) の環境保全プログラムを 2009 年から実施しています。今年度 9 月から開始のプログラムで 20 回を迎えます。これまで 77 名の若者たちがプログラムに参加し、ともに活動を行いました。

プログラムの要は、環境保全活動と、活動を通じて若者たちを育むことの両立です。里山保全活動などに取り組みながら、参加する若者たちがグリーンキャリアを積み重ね成長するということをとっても大切にしているプログラムです。

日本で「キャリア」という言葉を聞くと、職歴をイメージしますが、グリーンキャリアの含意はより広いものです。生活に必要な能力、役立つ能力 (ライフスキル) を身につけていくことも含みます。チームで働くことやリーダーシップを発揮することや、多様な人たちとのコミュニケーションの経験も獲得する力です (シティズンシップ)。生きる上での自身の価値観を定めたり、都市とは違う暮らしの中で視野を広げたりすることも大切です。持続可能性を学ぶことも大切です。



3 ヶ月という短い時間であっても、若者たちは活動から何かをつかみ変化しています。実際、参加者のうち、プログラム終了後栃木県に移住した若者は 6 人、外国人メンバーを含めると NPO で働いた人は 21 人になります。森林関係の仕事に就いた人は 1 人です。経験や実感が後押しをした選択だと思います。直接森林や林業に関する仕事だけでなく、グリーンな感性を生かして働く (グリーンカラージョブ)、ということもこれからますます重要になっていきます。そうした経験を活動から得ていく機会が、グリーンキャリアパスで

す。

実際、米国で最大の Conservation Corps である、カリフォルニア Conservation Corps は団体の目標をこう記しています。

「California Conservation Corps の目標の一つは、プログラム参加者のキャリアパスを広げ、プログラム終了後、彼らがより良い道へ進むことができるようにすることである。

CCC のキャリアパスは、プロジェクト作業、教育やトレーニングプログラムからなる。自然の中での作業はその重要な要素である」

米国においても、グリーンキャリアはそれくらい重視されています。

多様な若者たちのニーズに応じていけるグリーンキャリアパスを Conservation Corps プログラムには自身が応募し参加してくるので比較的元気な若者が多く集まります。こうした若者たちが里山保全活動など緑の活動を通じてさらに力をつけていくことも大切ですが、若者たちは多様です。ひきこもり状態にある若者や、働くことに困難を抱えている若者たちも多くいます。また近年では子ども、若者の貧困は大きな社会問題にもなっています。こうした若者たちもグリーンキャリアを積めるような環境やプログラムをどれだけ多様につくれるかは、現在の森づくりや環境保全団体に課せられた大きな役割であろうと思います。私たちも、Conservation Corps プログラムに参加する若者たちとともに、例えば整備した里山で困窮世帯の子どもたちの自然体験活動を企画運営したり、ひきこもりの若者向けの「森の居場所」を開催したり、働くことに困難を抱える若者のための「みどりの中間的就労訓練」を実施したりしています。これらの活動は、森林、里山が本来持つ力と相まって、参加する子どもや若者に前向きな変化を生み出しています。

グリーンキャリアパスの入口はできる限りハードルを低く、目指す高みはできる限り高く、その間にきめ細やかなステップを、様々な団体が実践を通じて作っていくことがこれから必要です。グリーンキャリアで力をつけた若者たちが次の社会を担っていく貴重な存在になっていきます。グリーンキャリアを積む機会を充実させていくことは社会投資です。

## 会員の活動報告

### ■Local Food Cycle 現場リーダーのサポート

平 由以子 (JCVN理事/NPO法人 循環生活研究所/ ローカルフードサイクリング 理事長)

#### ■活動の立ち上げ

循環生活研究所の立ち上げは、家族の病気がきっかけで環境と私たちの健康がつながっている、持続不可能な社会構造になっていっているという大きな危機感から、半径2km単位での資源循環を創造していくというミッションに行きつきました。活動が20年経過した頃、一定の成果は出たものの、世の中で見ると未だ90%の生ごみが焼却されているという事実を直視し、スピードを速めなければ間に合わないという軌道修正を行いました。研究会を立ち上げそこで生まれたのがローカルフードサイクリング(以下略称:LFC)事業です。稼働はじめたのは2016年から現在では、4カ所です。

これほど住民と密接に関わる重要なことか、継続のために必要な団体としての資質が求められることを実感しています。定点で活動するからこそさまざまな事象が見えてきました。

#### ■低下する環境意識とリーダーシップ

実は環境に関しての意識はここ10年で25%も低下しています。東日本大震災直後、一時的に上昇しましたが、その後は低下傾向が続いており、「環境をよくするために何をしたらよいかかわからない」と感じる人の割合が徐々に増加しています。しかしマイバックやマイボトルなどの一部で行動は習慣化しました。この背景には、効果を実感できないという課題が。生活に支障が出ないため、リサイクルの優先順位が低くなり環境改善を遅らせている傾向にあります。※生活者実態調査<花王 生活者研究センター調べより

そんな中で、多くの活動の中から自分たちの活動に時間や労力をさいてもらふことは、成果を示していかななくてはなりません。意義や情報と自分の価値観判断が行動をきめることから、現場リーダーへの委託事項は少なくありません。ミッションのためには成果が得られなければ努力を倍にしなくてはならないことがあります。なすべき

ことがあまりにも多い日常のルーティンの中で、軸がぶれずにリーダーでいることは本当に大変なことです。

#### ■大切なマネジメント

NPOはミッションのためには理想を追うという特有の傾向があるからこそ、見える成果もしくは成果をアンケートなどで数値化し見えるようにすることを計画に入れておかなければ、何のために苦労しているのかと心が折れてしまうことがあります。

時には、ミッションと経済性に関わる混乱による資源(人・モノ・お金・時間)の浪費が生じることがあります。小さな失敗の積み重ねが明日をつくっていきます。リーダーは頭をクリアしておかないと、現場のマネジメントが難しくなっていくため理想はプレストを週に1回をめどにしています。(実際は時間の確保に大変苦労しています)

#### ■自分とスタッフ、そして社会を変える

NPOは人を変えることができる素晴らしい業態であるとともに、常に自分自身の状況を把握し人の変化を促進していくことが求められ、うまくいけばスキルがあがっていく数式になっています。だから私自身も現場リーダーも何年も苦労しているのだと思います。わたしたちのミッション「持続可能な栄養循環をつくるコミュニティの努力を通じて、病気を予防し、寿命を延長し、身体的、精神的な健康の促進する社会の実現」に向かってスタッフが元気で楽しく働ける現場の運営に尽力していきたいと思っています。

## 連 載

### ■ ボランティアリーダーについて思うこと コンポストクルーのリーダー活動

本田正之（NPO法人循環生活研究所）

循環生活研究所（じゅんなまけん）は、半径2km 圏内で資源が循環するたのしい暮らしを提案する NPO です。私が活動する福岡市東区香椎照葉（アイランドシティ）では、都市部の人々が持続可能な暮らし方に取り組める環境づくり、地域からでる栄養（生ごみ）を各家庭のコンポストで回収し、堆肥化させ、地域で野菜に変えて循環させる「ローカルフードサイクリング（LFC）」という仕組みを作っています。



活動はコアボランティアスタッフをベースに、単発のボランティアで構成されています。コンポスト回収は作業や衛生面等において細かな決まりごとがあり、慌ただしい時間の中で全員と協力しながら確実にこなしていく必要があります。私は2年半前にじゅんなまけんへ転職したのですが、それまで現場での活動経験がほとんどなかったために四苦八苦の日々でした。

働きはじめの頃は、リーダーとして作業を整理し、役割を振り、メンバーをまとめていく力がありませんでした。自分が一生懸命になりすぎることによって周りのことが見えておらず、スタッフの視点が抜けていることも多々ありました。メンバーの想いを汲み取りたいのに作業を回すことに精一杯で、モヤモヤとした気持ちを抱えていました。リーダーは全てをこなしていくことが必要だと思いつぎていたのかもしれませんが。

JCVN の研修プログラムに参加して、それま

でのパーフェクトリーダー像の意識を外し、メンバーが力を発揮できる環境づくりを目指すようになりました。

メンバー個別にその都度指示を出していたのをやめ、朝の全体ミーティングで作業の流れや役割を確認したり、何時までどんな風に仕上げるのかという完成形をはじめに共有することにしました。また作業優先で疎かになりがちだった休憩を、意図のある時間と中身で積極的に設定。活動への参加動機や要望、不満等の話をしっかりと聞くことを意識し、LFC で目指すことや活動戦略をミーティングで確認し合い、コミュニケーションを確保するよう努めました。

次第に、ボランティアの方から課題や改善策が挙がるようになり、やらされ仕事ではない自分ごとの活動に変化していきました。活動の方向性を共有したことで積極的な姿勢になり、チームとしての力がついてきていることを実感しています。

ここに挙げた取り組みはほんの一部ですが、奇抜なものやユニークな取り組みは現段階ではさほど重要ではないことが分かります。JCVN の研修で基本のマネジメントがいかに大切かを学びました。もちろん課題はまだ多くありますが、チームとして活動する基本は JCVN のプログラムに詰め込まれていて、応用させながらより良い活動にしていきたいと思っています。



## ■ 事故事例コラム (3)

志賀 壮史 (JCVN 理事、NPO 法人グリーンシティ福岡理事)

ボランティア団体などの安全管理意識を高めるためには、活動に関連する「事故事例」を収集するのが効果的です。NPO 法人グリーンシティ福岡で2019年2~7月に収集した事故事例をご紹介します。日付は発生(したと思われる)日です。

\* \* \* \* \*

### 2/4 雪まつりの準備中、雪像が崩れ死亡

(朝日新聞デジタル 2019年2月4日 22時55分)  
新潟県十日町市。70歳男性が雪像の下敷きに。

### 3/30 民有林の伐採で下敷き 男性死亡

(北海道新聞 2019年3月30日)  
北海道八雲町。16mのトドマツで頭を強打。

### 4/3 雑木林で伐採中 倒木が直撃

(産経デジタル 2019年4月3日)  
栃木県小山市。スギ伐採で伐倒木が直撃。  
※他にも 4/22 福島県二本松市の伐採中のはしごからの転落。5/14 北海道佐呂間町の伐採木に巻き込まれ。6/11 滋賀県高島市で同僚による伐倒木の直撃など、今年の上半期は森林・林業分野での死亡事故の報道が目立った。

### 4/16 林業安全講習で受講者死亡

(NHK NEWS WEB 2019年4月16日)  
青森県野辺地町。伐採の講習会で講師が伐採した木が受講者に直撃した。

### 5/5 登山中に落雷、男性死亡

(神奈川新聞 2019年5月5日)  
神奈川県秦野市。山頂から640m地点。雨が降り始め木の下に移動したところ雷に撃たれた。

### 5/23 運動会練習中に熱中症か？

(朝日新聞 2019年5月23日)  
新潟県長岡市。小学校から119番通報で児童26人が搬送(その時点での気温24.2度)。  
※他にも 5/29 には福岡県宇美町で高校から119番通報、高校生12名が搬送(最高気温27.8度)。  
7/5 には佐賀市の高校から119番通報、高校生17名を搬送(最高気温29.4度)。

### 7/5 清掃中に川で3歳児溺死

(高知さんさんテレビ 2019年7月5日)

高知県高知市。河川の一斉清掃に一緒に来て遊んでいた3歳児の事故。

\* \* \* \* \*

2/4の雪まつりの事故。当日は3月下旬並みの気温で、朝から雨が降っていたそうです。雪以外でも降雨後、水を吸って重くなった枯れ枝が落ちてくるのを目の前で見たことがあります。雨が降って重くなるもの、崩れやすくなるものがあることに注意したいと思います。

2019年の上半期は森林・林業分野での事故の報道が目につきました。

その中でも考えさせられたのが、4/16の青森県の伐採講習会での事故です。安全講習会での事故であること。講師による伐採で起きたこと。予定にない追加の伐採であったこと。見込みと180°反対の方向に倒れたことなど、問題は多いです。さらに、別の視点でマズイのはその後の対応。事故を起こした支部組織にはウェブサイトが無く、支部を統括する全国組織のサイトでも、当該事故の情報公開や今後の対策、被害者や関係者へのお詫びなどはほぼ行われていません。(2019年8月5日時点)。うーん。事故後の対応としてこれはちょっと、うーん…。

5月に熱中症の報道が複数ありましたが、運動会練習&気温の急上昇が理由のようです。いずれも軽症。現場の状況次第ですが、報道されたり騒ぎになることを恐れずに119番通報を行なった、とポジティブな見方をすることもできます。

7/5の河川清掃中の3歳児の事故はたいへん悲しい、痛ましいものでした。高知市が主催した一斉清掃で、お父さんは草刈り、息子さんはカニをつかまえて遊んでいたそう。親であろうとたまたま居合わせただけであろうと、子どもたちを守っていくために、その場にいるみんなで目を配ったり、声をかけたりしていかねばと感じました。

## お知らせ

## イベント・ボランティア情報

● CVI : 環境保全活動リーダー研修  
2019 一日講座のご案内

環境保全活動(森づくり、棚田保全、堆肥づくり)や災害ボランティア活動などの現場では、参加するボランティアとコミュニケーションしながら「安全でやりがいある活動」を運営する現場リーダーの存在が大切です。

今回の一日講座では、環境保全活動や災害ボランティア活動の運営に必要な活動計画や課題解決、地域の巻き込み方などについて、実習を交えながら皆さんと考える予定です。活動リーダーの方はもちろん、ボランティアとして活動を支えたいと考えている方にもお勧めです。皆様からのお申込みをお待ちしております！

## ◇ 9月29日(日)

■内容：里山保全概論、活動計画、チームビルディング、課題解決、地域の巻き込み方

■とき：9:30～16:30(受付9:15より)

■場所：九州大学 大橋キャンパス 2号館2階プレゼン室(福岡市南区塩原4丁目9-1)

<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/campus/ohashi>

■対象：環境保全ボランティアや災害ボランティアに取り組んでいる方、これから取り組もうとしている方、若手スタッフ等

■参加費：一般 5,000円/回、学生・JCVN会員 3,500円/回

■定員：15名

■申し込み方法：以下のフォームからお申し込みください。

<http://www.jcvn.net/article/16167306.html>

または以下の項目をご記入の上、お申込み下さい。

1) お名前 2) 連絡先 3) 所属(あれば)  
4) 環境保全活動やボランティア活動で課題と感じていること

5) その他(ご希望・ご質問)

## ◆お問合わせ・お申込み先◆

TEL/FAX：092-215-3966

Eメール：[jcvn@greencity-f.org](mailto:jcvn@greencity-f.org)

サイト：<http://www.jcvn.net/>

■主催：NPO法人日本環境保全ボランティアネットワーク(JCVN)

■協力：NPO法人循環生活研究所、NPO法人グリーンシティ福岡、NPO法人トチギ環境未来基地、NPO法人山村塾、九州大学大学院芸術工学研究院

## ●JCVNの仲間を広く募集しています！

あなたの支援が、「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる環境保全活動をめざした団体のネットワークづくりの力になります。入会申込書をご送付いたしますので、事務局までお問い合わせください。

JCVN理事をはじめ、環境保全活動の専門家のノウハウが詰まった会報が、年に3回お手元に届きます！また、メーリングリストでもJCVNが開催・協力するイベント情報等を随時ご案内いたします。

活動への寄付も受け付けています。環境保全団体のネットワークづくり、リーダー育成支援のため、皆さまのご協力をお待ちしています！

- ・個人正会員(¥10,000/年)
- ・個人賛助会員(¥5,000/一口以上)
- ・団体正会員(¥20,000/年)
- ・団体賛助会員(¥10,000/一口以上)

[会費・寄付振込口座]

番号：01760-9-122407

名称：日本環境保全ボランティアネットワーク

## CONSERVATION VOLUNTEERS 20

■発行日：2019年9月13日

■発行頻度：年3回

■発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク(略称：JCVN)

■事務局：〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202  
tel/fax: 092-215-3966  
e-mail: [jcvn@greencity-f.org](mailto:jcvn@greencity-f.org)